

【特集】アメリカの構造的差別を問う：歴史とその実態（1）：「表現という剣」：ワッツ・ライターズ・ワークショップとロスアンジェルスにおける制度的人種差別との闘い

TSUCHIYA, Kazuyo / 土屋, 和代

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Journal of Ohara Institute for Social Research / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

761

(開始ページ / Start Page)

49

(終了ページ / End Page)

62

(発行年 / Year)

2022-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00025465>

「表現という剣」

——ワッツ・ライターズ・ワークショップと
ロスアンジェルスにおける制度的人種差別との闘い

土屋 和代

はじめに

- 1 ワッツという舞台
- 2 ビバリー・ヒルズからワッツへ——バッド・シュールバーグとワッツ・ライターズ・ワークショップ
- 3 『焼け跡から——ワッツの人びとの声』
- 4 資本主義批判、ブラック・ナショナリズム、前衛的な詩への希求——ワッツの13人
おわりに

はじめに

1964年の公民権法と65年の投票権法は、ジム・クロウと呼ばれる人種隔離制度にメスを入れて解体させたはずであった。しかし刑務所に収監される人口が激増したのは同法が成立して以降のことだった。公民権法と投票権法の成立によってアメリカは人種・肌の色で差別しない「カラブライインド」な社会に向かうはずであったが、拡大する刑罰国家の下で黒人や他の有色人種の人びとの市民権は大幅に制限された。「大量収監社会」が形成されたのである⁽¹⁾。

1960年代後半にこの大量収監社会の「実験場」となったのが、65年に大規模な蜂起が起きたロスアンジェルス（以下LA）のワッツ地区である。8月11日、21歳の黒人青年マーケット・フライが、助手席に座っていた兄と現場に駆けつけた母とともに逮捕された。この事件に端を発し、17日まで7日間に及んだ蜂起は、34人の死者、1,032人以上の負傷者、3,592人の逮捕者を出し、被害総額は4000万ドルに達した⁽²⁾。「囚人都市」として長い歴史をもつLAは、このワッツ蜂起をき

(1) 詳しくは拙論「刑罰国家と『福祉』の解体——『投資—脱投資』が問うもの」『現代思想』第48巻13号（2020年10月臨時増刊号）、124-131頁を参照。

(2) The Governor's Commission on the Los Angeles Riots [McCone Commission], "Violence in the City: An End or a Beginning?," in *The Los Angeles Riots: Mass Violence in America*, comp. Robert M. Fogelson (New York: Arno Press and the New York Times, 1969); Robert M. Fogelson, "White on Black: A Critique of the McCone Commission Report on the Los Angeles Riots," in *The Los Angeles Riots: Mass Violence in America*, 113.

かけに大量収監の時代における「犯罪との戦い」のモデル都市となった⁽³⁾。

1965年の蜂起により、ワッツは無名の地から、人びとが忘れたくても忘れられない「人種暴動の地」に転じたと作家のトマス・ピンチョンは指摘した。ワッツはLAにおいてアナハイムにあるディズニーランドと対置される場所となった。ディズニーランドが人びとの幻想と憧憬のなかで「ユートピア」となったとすれば、ワッツは貧困と放火と略奪を想起させる「ディストピア」、つまり黒人の憤懣の象徴となったのである⁽⁴⁾。

2013年以降、度重なる警察や自警団の暴力によって黒人の命が奪われ続けてきたことに対して、アメリカ史上最大規模と呼ばれる抗議行動——ブラック・ライブズ・マター（BLM）運動——が起こるなかで、アメリカがいかに大量収監社会の道を行ってきたのかを明らかにする研究が次々と出版されている。しかし「人種暴動の地」に暮らす人びとによって、人種差別に抗う言説がいかに生み出されたのかという点について十分に分析されてきたとは言いがたい。刑罰国家の拡大、大量収監社会の形成過程を追うと同時に、そうした現状に警鐘を鳴らすオルタナティブな思想がいかに編み出されていたのかに光をあてる必要があるだろう。それは「過去」と「いま」をつなぎ、BLM運動が祖上に挙げる警察暴力と貧困という暴力を問う思想がいかに今日に至るまで育まれてきたのかを探ることにもなる。

本稿は、ワッツ・ライターズ・ワークショップ（以下、ワークショップ）という、詩、短編小説を創作するワッツに暮らす人びとを束ねた組織を取り上げる。革新的な作品集を刊行したこのワークショップと、そこから分離独立し結成された団体「ワッツの詩人」をめぐるのは、アフリカ系アメリカ人研究者のジェームズ・エドワード・スメサーストや歴史家のダニエル・ワイドナーらの研究がある⁽⁵⁾。しかしこれらの研究は「ワッツの詩人」誕生の経緯に焦点をあてている。ワークショップ設立の経緯や歴史的意義をふまえた上で、なぜ内部で分裂が起こり、「ワッツの詩人」の結成に至ったのか、この分裂が何を意味しているのかを検討する必要がある。本稿ではワークショップと「ワッツの詩人」に参加した人びとの作品も「史料」として分析する。ロックフェラー財団の史料やワークショップを創設したバッド・シュールバーグの個人文書を使用しつつ、黒人の詩人、作家による「先駆的なアンソロジー」とされるこれらの作品群とそこから浮かび上がる制度的人種差別

(3) Elizabeth Hinton, *From the War on Poverty to the War on Crime: The Making of Mass Incarceration in America* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2016) ; Kelly Lytle Hernández, *City of Inmates: Conquest, Rebellion, and the Rise of Human Caging in Los Angeles, 1771-1965* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2017) ; Max Felker-Kantor, *Policing Los Angeles: Race, Resistance, and the Rise of the LAPD* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2018).

(4) Thomas Pynchon, "A Journey into the Mind of Watts," *New York Times*, June 12, 1966; Sarah Schrank, *Art and the City: Civic Imagination and Cultural Authority in Los Angeles* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2009), 156-157; 小論「〈廃品〉からの創造——S・ロディアのワッツ・タワーとブラック・ロスアンジェルス」熊谷謙介編『破壊のあとの都市空間——ポスト・カタストロフィーの記憶』(青弓社, 2017年), 287-317頁

(5) James Edward Smethurst, *The Black Arts Movement: Literary Nationalism in the 1960s and 1970s* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 2005) ; Daniel Widener, *Black Arts West: Culture and Struggle in Postwar Los Angeles* (Durham: Duke University Press, 2010) ; Mike Davis and Jon Wiener, *Set the Night on Fire: L.A. in the Sixties* (London: Verso, 2020) ; Mark Nowak, *Social Poetics* (Minneapolis: Coffee House Press, 2020).

に抗う思想を読み解きたい。

1 ワッツという舞台

ピンチョンの語る「人種暴動の地」はどのように形成されたのだろうか。「ランチョ・タユタ」という名の小さな農村だったワッツの開発が急激に進んだのは20世紀に入ってからであった⁽⁶⁾。この地は1880年代にこの地区の土地所有者であった不動産業者の名を取って「ワッツ」と呼ばれるようになった。1902年、パシフィック電鉄が、ワッツ地区の103通りとグラハム通りの交差点に新駅を設置し、ワッツは4方向（サンタ・アナ、ロング・ビーチ、サン・ペドロ、ルドンド）からダウンタウンに向かう線路の分岐点となった。ワッツ商工会議所の言葉を借りれば、このワッツ駅の開発とともに、地域一帯は「LA世界の中心地」となったのだ。

その後、ワッツは「労働者向けの街」として開発が進んだ。1906年には1,400人の人口を抱え、翌年に独立した一つの自治体となった。特に駅がある103通り沿いには教会、商店、酒場などが建ち並び、コミュニティの中心として栄えた。ワッツの人口はその後膨らみ続け、1920年には4,529人に達した。この当時、ワッツは多様な人種・エスニック集団に属する人びとが織りなす居住区だった。なかでもアラバマ、ルイジアナ、ミシシッピ、テキサス諸州から移り住んだ黒人たちは、鉄道でのウェイターやポーター、家事使用人の仕事を不得ていった。この時期はまだ居住区の人種隔離が強固なものとはなっていなかった。

第二次大戦の勃発により、さらに多くの黒人がLAの軍事施設での職を求めて南部から移住した。1942年から45年のわずか3年間にカリフォルニアには34万人の黒人が移住し、そのうち約20万人がLA地域に居住した。これらの移住者の大半は、制限的不動産約款によって居住先が限定された結果サウス・セントラルと呼ばれるセントラル通り沿いの地域に住居を構えた。1948年には制限的不動産約款を違憲とする最高裁判決が下るものの、その後も事実上の隔離は続いた。黒人人口が増加するなかで、白人は郊外へ、ラテンクス（中南米系）はイーストLA周辺へと移動していった。

ワッツも例外ではない。1940年から60年にかけて、ワッツの黒人人口は8倍へと膨れあがった。1960年の時点でのワッツの人種構成は、白人5.5%、黒人85.7%、ラテンクス8.8%となり、65年には3万4000人の人口のうち黒人住民が87%を占めるに至った⁽⁷⁾。

居住区が制限され、サウス・セントラルに黒人の集中が進む一方で、同地区では脱産業化が進行し、工場が都市中心部から去るなかで、黒人住民が職を見つけることは次第に困難となった。1960年の統計では、市全体の失業率が5.3%だったのに対して、市南部では11.3%にのぼっていた。この結果1965年の時点で市南部の住民の26.8%（すなわち4分の1の家庭）が「貧困線」以下の生

(6) ワッツ地区の歴史については、MaryEllen Bell Ray, *The City of Watts, California: 1907 to 1926* (Los Angeles: Rising Publishing, 1985) ; Gerald Horne, *Fire This Time: The Watts Uprising and the 1960s* (1995; reprint, New York: Da Capo Press, 1997), 23-42; Nathan E. Cohen, "The Context of the Curfew Area," in *The Los Angeles Riots: A Socio-Psychological Study*, ed., Nathan Cohen (New York: Praeger Publishers, 1970), 41-80 を参照。

(7) Cohen, "The Context of the Curfew Area," 43-44; Horne, *Fire This Time*, 27.

活（4人家族の年間家庭所得が3,130ドル以下）を送っていた。なかでもワッツでは、「貧困線」以下の生活を送る人びとの割合値は41.5%に達していた⁽⁸⁾。こうした失業とそれに伴う貧困こそが、1965年8月の蜂起を引き起こす一大原因となった。

群衆たちの怒りが沸点に達したのは、フライが連行される際、白人警官から蹴りつけられ車に押し込められたのを目の当たりにした時だった。さらに怒りの火に油を注いだのは、フライ逮捕の事件とは無関係の20歳の黒人女性ジョイス・アン・ゲインズが暴力的な方法で逮捕されたことだった。ゲインズは、警官に唾を吐いたという罪で捕らえられ、首に腕を回され、「ほとんど息ができないほど」締め付けられた状態で逮捕された。これを見守っていた人びとは警官に投石し、大規模な蜂起へとつながった⁽⁹⁾。

1965年8月19日にカリフォルニア州エドモンド・G・“パット”・ブラウン知事によって、ワッツ蜂起を調査するため設置されたのがLA蜂起に関する州知事委員会、通称マッコーン委員会である。元CIA（中央情報局）長官のジョン・A・マッコーンが委員長を務めた8名の委員からなるこの調査委員会は、ブラウン知事やワッツの住民をはじめとする79人に証言を求め、数百名の人びとにインタビューを行った。事件から4ヶ月後の12月2日、委員会は「都市の暴力——終わりが始まりか？」という報告書（以下、マッコーン報告書）を刊行した。委員会は失業、教育施設の不十分さ、警察との対立、交通設備の不十分さといった問題を「暴動」を引き起こした根本的な原因として指摘した。さらに、「法への不服従」、住宅公平立法を廃止する住民提案14号が可決されたことへの失望と、1964年の経済機会法の制定に伴い開始された貧困対策事業が大々的に宣伝されていたにもかかわらず、実質的な改善が少ないことへの不満が事態を悪化させたと指摘した⁽¹⁰⁾。

しかし黒人自由闘争の指導者からは、マッコーン委員会が蜂起に関与した人びとを「極端かつ不法な手段」に訴える「無法者」としてとらえ、ワッツ住民が抱える警察およびゲッターでの苦境に対する深い憤りを無視しているとの不満の声が上がった。実際、「暴徒は破壊をもたらす激しい怒りに囚われているかのようだ」と記すなど、委員会はワッツ蜂起を「暴徒」による破壊・略奪行為として位置付けていた。そうした「破壊」は「人びとを荒廃させる機能不全のスパイラル」によってもたらされたものであり、人びとの「怠惰さ」を矯正させるためにも雇用機会を増やす必要があると委員会は強調した。報告書はまた、「彼らの不平不満がどれ程大きなものであれ、暴徒たちは彼らがもたらした傷跡を、法的・道徳的に正当化することはできない」と記し、蜂起の契機となったワッツの住民が被る警察暴力よりも、「暴徒」たちがもたらした「混乱」を非難したのである⁽¹¹⁾。

(8) Welfare Planning Council, Los Angeles Region, *Social Profiles: Los Angeles County* (Los Angeles: Welfare Planning Council, 1965), sc, sc-15.

(9) “DA Discloses New Riot Cause,” *Los Angeles Times*, October 28, 1965.

(10) McCone Commission, *Violence in the City*.

(11) McCone Commission, *Violence in the City*, 1, 5-8.

2 ビバリー・ヒルズからワッツへ

——バッド・シュールバーグとワッツ・ライターズ・ワークショップ

ワッツ・ライターズ・ワークショップの生みの親となったのは、脚本家で小説家のバッド・シュールバーグであった。1914年3月27日にマンハッタンユダヤ系居住区で生まれたシュールバーグは、家族とともにLAに移住し、映画プロデューサーとして名を成す父と、ハリウッドを代表するタレント・エージェントとなる母のもとで裕福な少年時代を過ごした。1941年には、ニューヨークにある新聞社の雑用係からハリウッドのシナリオライターへと出世する主人公サミイ・グリックの生涯を描いた『何がサミイを走らせるのか?』(1941年)を刊行し、一躍注目を集めた。

シュールバーグは共産主義者の勉強会に参加したことをきっかけに、1937年頃にアメリカ共産党に入党した。しかし、『何がサミイを走らせるのか?』を執筆中に、党員としての活動時間を削ってまで作品を刊行する意義があるのかを党関係者から問い質されたことをきっかけに党から距離を取るようになったという。下院非米活動委員会(HUAC)の聴聞会に証人として喚問された際には、この時の苦い経験を明かし、共産党を批判するとともに、委員会に協力し共産党員だった他の関係者の名前を告げたため、「裏切者」として批判を浴びた。証言を拒み、議会侮辱罪の罪で起訴され、投獄された10人の映画人(「ハリウッド・テン」)とは対照的に、シュールバーグは赤狩りの時代後に活躍の場を拓け、1955年にはエリア・カザン監督の映画『波止場』(1954年)でアカデミー脚本賞を受賞するなど、ハリウッドを代表する映画脚本家となった⁽¹²⁾。

1965年8月にワッツ蜂起が起きたとき、シュールバーグは、通常のテレビでは流れない、「生とその下に暗く横たわる死」をとらえた映像に衝撃を受けたという⁽¹³⁾。たまたまニューヨークから訪れていたコラムニストに「一体あそこで何が起きているのか」と質問されたが、映像を観れば観るほど、何が起きているのかわからないことに気づいた。「本を読めばわかることではなく、[ワッツの西側を走る]セントラル・アヴェニューの誰かに電話をかけて『そこはどんな感じですか?』と聞けるわけでもない。自分でそこに行かなければならないことがわかった⁽¹⁴⁾。」「強い好奇心と自身の居場所を失った感覚」、および作家には「何が起きているのかを知る責任がある」という思いに駆られ、「豪華で贅沢な暮らしをしている白人が住む煌びやかなビバリーヒルズ」を抜け出して、フリーウェイを東へ、南へと疾走し、ワッツへと向かった⁽¹⁵⁾。

センチュリー通りからワッツ地区へと入ったとき、広く、きれいな並木道と、整然とした家々、花壇と芝生に「一体何が不満なのか?」と感じたという。しかし103通りを東に向かうなかで、「第二次大戦下の、ロンドン大空襲以来見たことのない荒廃と都市の崩壊」が目飛び込んできた。

(12) Widener, *Black Arts West*, 106; Nicholas Beck, *Budd Schulberg: A Bio-bibliography* (Lanham, Maryland: The Scarecrow Press, Inc., 2001), ix, 9.

(13) Budd Schulberg, "The Angry Voices of Watts," n.d., Folder 2, Box 106, Budd Schulberg Papers, Rauner Special Collections Library, Dartmouth College, Hanover.

(14) Schulberg, "The Angry Voices of Watts."

(15) "The Valuator Interviews: Budd Schulberg," n.d., Folder 4010, Box 469, RG 1.2, Series 200 R, Rockefeller Foundation Archives; Schulberg, "The Angry Voices of Watts."

そこには蜂起後のワッツ——「破片、割れたガラスだらけの空き地、焼け落ちたスーパーや酒屋、破壊された質屋の残骸」があった⁽¹⁶⁾。

ウェストミンスター近隣協会の建物に入ると、剥き出しのビリヤード台とキーキーいうジューク・ボックスのあるレクリエーション・ルームに、地元の若者が集っていた。この協会は、1959年にアメリカ合衆国長老教会によって設立され、「貧困との戦い」と呼ばれるジョンソン政権下の貧困対策事業から資金援助を受けつつ、貧困撲滅のために様々な事業を展開していた⁽¹⁷⁾。その場にいた大半の若者はシュールバーグに「敵対的」であり、「握手することを拒んだどころか、私を一瞥しようとすらしなかった。」のちにシュールバーグはこれが「自分にとって学びの始まりだった」と語っている⁽¹⁸⁾。職員に何か手伝えることはないか聞いたところ、作家なのだから創作の授業を始めてみてはどうかと提案を受けた。彼はこの提案を受けて毎週金曜日の午後にワークショップを開くこととなった。

ワークショップの経験はシュールバーグにとって発見の連続であった。6年前、コロンビア大学で作文の授業を担当したとき、学生から何を書けばよいかわからないという相談を受けたという。一方、ワークショップの受講生の半数は高校を卒業していなかったが、コロンビア大学の学生より「レベルはずっと高かった。」シュールバーグが受講生にワッツに生きる人びとの願いを一言で表すよう伝えたとき、受講生のひとりでワークショップを束ねたハリー・ドーランは「機会」、バーデル・チューは「正義」と答えた。別の受講生は、自分たちが欲しているのは「自由」であり、「恐らく」とか「希望」という言葉にはうんざりしていると話した。「自由がなければ死刑囚のようなものであり」、ジョンソン大統領が語る「偉大な社会」にアメリカがなる日を待つことなどできないと語った。さらに別の生徒は、裕福な地域ではキングサイズのベッドに2人で寝ているが、自分たちはシングルベッドに4人で寝ており、瓦礫とネズミだらけの街に暮らす自分たちはアメリカで「人間」ではないのだと言い切った⁽¹⁹⁾。

こうしたワークショップの参加者が放った言葉は、シュールバーグによればマッコーン報告書の「生気の無い」文章と極めて対照的だった。報告書にある「黒人の多くは住民提案14号の可決によって侮辱されたと感じるような気持ちになった」という文章を例に、もし自分のクラスの受講生がこのような曖昧模糊とした文章を書いたら、落第をちらつかせたいと述べた。実際は「侮辱された」のではなく「激しく憤っていた」のではないか。そもそも一体誰がそのような気持ちにさせているのか。「マッコーンさんよ、物事をありのままに伝えなさい」とシュールバーグは皮肉をこめて語った⁽²⁰⁾。

マッコーン報告書の文章は文法上なら問題がないかもしれない。しかし、創作活動において文

(16) “The Valuator Interviews: Budd Schulberg.”

(17) Presbyterian Historical Society, “Westminster in Watts,” *Journal of Presbyterian History* 92, no. 2 (Fall/Winter 2014), 73-79; Tsuchiya, *Reinventing Citizenship*.

(18) U.S. Congress, Senate Committee on Government Operations, Subcommittee on Executive Reorganization, *Federal Role in Urban Affairs*, hearings, 89th Cong., 2nd sess. (Washington, D.C.: U.S. Government Printing Office, 1966), 2460.

(19) Schulberg, “The Angry Voices of Watts.”

(20) Schulberg, “The Angry Voices of Watts.”

法は「二次的なもの」に過ぎない。シュールバークは「この国には文字や句読点を美しく綴るが、何も言うことがない〔全人的に組織に献身する〕組織人でいっぱいだ」と語る。教員の側は「正しい句読点や文法」に執着し、生徒の「書きたいという欲求」を抑え込んでしまっているが、教員はむしろ、たとえ一時的に文法に問題が生じることがあっても、「才能の閃き、自由な発想の流れ」を重んじるべきである。生徒に何を書くべきかを伝えるのではなく、考えを引き出し、「ありのままに」伝えること、自分たちの声は届くのだと励ますことが必要だとシュールバークは述べた⁽²¹⁾。

ワークショップを通してワッツを生きる人びとの作品に出会ったシュールバークは、次第に自分の生徒たちを「落第生」とみなすアメリカ社会そのものを批判的にとらえるようになった。

ワークショップの参加者が極めて優れた作品を生み出したことは、一つの「問い」を投げかけているとシュールバークはのちに上院政府活動委員会の執行府改編に関する小委員会が開催した公聴会で証言している。もし高校を中退した人が詩を書き、その詩が中学・高校生向けの雑誌に掲載され、その詩の作者が英語の授業で落第点をとったまさにその学校で教材として配布される時、それは一体何を意味しているのだろうか⁽²²⁾。落第したのはその生徒ではなく、その生徒の才能を発見し、伸ばすことができなかった学校であり、社会ではなかったのか⁽²³⁾。ワッツの公立学校には食堂が無く、生徒の多くは十分な食事を得ていない。図書館も無い。ジョンソン大統領はアメリカを「偉大な社会」にすると高らかに謳うが、偉大かどうか以前に、アメリカはまず最低限「社会」と呼べる状況を目指すべきではないか⁽²⁴⁾。

教育施設は粗末だが、警察の監視・取締りは日常の一部であった。シュールバークは、ワッツではパトカーのサイレンが常に鳴り響き、ワークショップが行われていた103通りを、警察車両が行ったり来たりする音がこだましていたという⁽²⁵⁾。ワッツ蜂起後、警察は監視・取締りを強化し、ワッツの若者たちの行動により一層目を光らせるようになった。ワークショップの若者が通う地元



写真1 上院の政府活動委員会・執行府改編に関する小委員会が開催した公聴会に出席した、ハリー・ドーラン（左）、バッド・シュールバーク（中央）、ワッツ・ライターズ・ワークショップの参加者のひとりジョニー・スコット（右）（1966年12月9日）。

出典：Folder 58, Box 108, Budd Schulberg Papers, Rauner Special Collections Library, Dartmouth College, Hanover.

(21) “The Valuator Interviews: Budd Schulberg.”

(22) “The Valuator Interviews: Budd Schulberg.”

(23) Memo, Budd Schulberg, March, 1967, Folder 4010, Box 469, RG 1.2, Series 200 R, Rockefeller Foundation Archives.

(24) U.S. Congress, Senate Committee on Government Operations, Subcommittee on Executive Reorganization, *Federal Role in Urban Affairs*, 2458.

(25) U.S. Congress, Senate Committee on Government Operations, Subcommittee on Executive Reorganization, *Federal Role in Urban Affairs*, 2482.

のジョーダン高校では、構内に警察官が配置され、入構にあたり、警察がIDを確認するようになった。ワークショップの参加者でシュールバーグとともに公聴会で証言した先述のドーランは、ショットガンを抱えた警察官はまるで「いつでもお前らをぶっ飛ばしてやる」と言っているかのようだと言った。だからこそ、ショットガンを積載した警察車両が近づいてくるのを見ると自然と怒りが沸いてくるのだと⁽²⁶⁾。

シュールバーグは度々ワッツをナチ統治下の強制収容所にたとえた。シュールバーグにとって、ナチ統治下のユダヤ系に対する迫害とアメリカ黒人が経験する人種差別は重なって映ったのかもしれない。ワッツの「怒れる若者たち」が怖くはないのかとシュールバーグはインタビューで質問を受けた際、自分は「強欲と身勝手さ、自身の見解に盲目的に固執し、ワッツのような孤立した地区のまわりに強制収容所のような壁を造り出す社会の力学にぞっとするほど無知であることの方が恐ろしい」と答えている⁽²⁷⁾。1965年8月にワッツで起きたのは「暴動」ではなく「本格的な反乱」であり、何年もかけて醸成されたものであった。ウエストサイドに住む白人富裕層は、「LAの北や西ばかり」を見て、南東に位置するワッツで何十万人もの人びとが「貧困と飢餓、失業、教育やレクリエーションが欠けていることを心配し、屈辱感に苛まれ、傷ついている」ことにまるで気づいていないことが問題だったのである⁽²⁸⁾。

3 『焼け跡から——ワッツの人びとの声』

ワークショップの参加者が次第に増えると、ウェストミンスター近隣協会の一室では手狭となった⁽²⁹⁾。このため参加者たちが家具店をアートセンターへと改築したワッツ・ハプニング・コーヒー・ハウスへと場所を移し、フレデリック・ダグラスの名をとって「ダグラス・ハウス」を名付けた。参加者にとって、ダグラスは奴隷制という「恐ろしく不利な状況」にあって学ぶ機会を奪われていたにもかかわらず、文芸において頂点を極めることができると示したパイオニアであった⁽³⁰⁾。

ワークショップの活動資金は当初はシュールバーグのポケット・マネーから出されていたが、規模が拡大するなかシュールバーグは知り合いの作家、後援者から月25ドル、年300ドルの寄付金を募った。その呼びかけに応えたのは、ジョン・スタインベックやジェームズ・ボールドウィンなど同時代のアメリカを代表する作家や、『波止場』の監督を務めたエリア・カザン、政治家のロバート・F・ケネディなどであった。スタインベックの働きかけにより、芸術と人文科学の全米財

(26) U.S. Congress, Senate Committee on Government Operations, Subcommittee on Executive Reorganization, *Federal Role in Urban Affairs*, 2493.

(27) Memo, Budd Schulberg, March, 1967.

(28) Budd Schulberg, "The Watts Workshop," *Playboy*, September 1967, 111.

(29) "The History of Douglass House," n.d., Folder 76, Box 106, Budd Schulberg Papers, Rauner Special Collections Library, Dartmouth College, Hanover.

(30) "Douglas House (Watts Writers Workshop)," n.d., Folder 4010, Box 469, RG 1.2, Series 200 R, Rockefeller Foundation Archives.

団から助成金も獲得した⁽³¹⁾。

一躍ハリウッドと文芸の場で注目を集めるようになったワークショップに映画や出版業界など「あらゆる方向からチャンスが舞い込む状況」となった⁽³²⁾。1966年6月にはワークショップに参加した3人の詩が『LA マガジン』誌に掲載され、中学生・高校生向けの雑誌で取り上げられた。1966年8月16日にNBC放送がワークショップについてのドキュメンタリー「ワッツの怒りの声」を放映し、先述のドーランやチューなど7人が自作を読み上げた。67年2月17日にはドーランの短編小説が原作とする劇がNBCテレビで放映された。メンバーのなかには大学への奨学金を獲得する生徒や教職に就く者も現れた⁽³³⁾。

シュールバーグが編者を務め、序論を書くかたちで1967年に出版された『焼け跡から——ワッツの人びとの声』には、ワークショップに参加した18人の作品が所収された。イースト・ハーレム地区でワークショップを運営していたプエルトリコ系の詩人、脚本家、画家のピリ・トーマスによれば、このアンソロジーは「尊厳を求める黒人の叫び」を見事に表わしたものであり、全米に散らばる同種のワークショップに刺激を与えるものだった⁽³⁴⁾。俳優で監督のシドニー・ポワチエのナレーションでちにコロンビア・レコードからLP版も出されることになるこの『焼け跡から』——黒人作家たちによる初のアンソロジーとして知られる——にはどのような「声」が綴られていたのだろうか⁽³⁵⁾。

ソノラ・マケラーは、看護師で歌手、ダンサーであり、ウェストミンスター近隣協会で働いていた。53歳のマケラーはワークショップに当初から参加していた人物のひとりである。「ワッツ——小さなローマ」と題された作品のなかで、マケラーは65年のワッツ蜂起が起きるずっと前から黒人とメキシコ系住民に対して警察の嫌がらせが続いてきたと訴えた。黒人、メキシコ系、アパッチ族の先住民、ドイツ系の祖先をもつ彼女は、『焼け跡から』のなかで、多様なバックグラウンドをもつ人びとの「声」を代弁する人物だと評された。マケラーは作品のなかで「ストリートでどんな市民も立ち止まらせて、公衆の面前で恥曝しにする」警察が罪なき人びとを収監する日常を炙り出した⁽³⁶⁾。

ハリー・ドーランは1927年11月にピッツバーグで生まれ、沿岸警備隊を除隊後編集者や清掃作業員として働き、ワッツ蜂起が起きた際ロスアンジェルス・ハーバー・カレッジに通っていた。

(31) “The History of Douglass House,” n.d.; “Grant in Aid to Douglas House Foundation, Los Angeles, toward costs of the program of the Watts Writers Workshop,” March 13, 1968, Folder 4010, Box 469, RG 1.2, Series 200 R, Rockefeller Foundation Archives.

(32) Voices from Watts: *Newsletter of Douglass House*, October 1968, Folder 78, Box 106, Budd Schulberg Papers, Rauner Special Collections Library, Dartmouth College, Hanover.

(33) “Accomplishments of Douglass House (Home of the Watts Writers Workshop),” n.d., Folder 4010, Box 469, RG 1.2, Series 200 R, Rockefeller Foundation Archives.

(34) Piri Thomas, “From Arson to Thousand Candles,” September 23, 1967, Folder 4010, Box 469, RG 1.2, Series 200 R, Rockefeller Foundation Archives.

(35) “Progress Report from Douglass House Foundation,” April 1 through July 31, 1968, Folder 4011, Box 470, RG 1.2, Series 200 R, Rockefeller Foundation Archives.

(36) Sonora McKeller, “Watts—Little Rome,” in *From the Ashes: Voices of Watts*, ed. and with an introduction by Budd Schulberg (New York: the New American Library, 1967), 211–218.

ドーランにとって、書くことは「自分の人生のあらゆる逆説を一点に流し込む」作業であった。のちにNBCで放映されたテレビドラマの脚本「物をなくした人は泣くしかない」で名を成したドーランは、「ワッツでまた暴動が起きるのか？」と題された詩のなかで、「まったく思慮を欠くかたちで、武装した白人が同じ暴力行為を行うとき、その行為は忘れ去られることも許容されることもない」と断言した。むしろそれは、「人びとが死に満たされ死を歓迎するまで、人間という弾丸を詰め込み、燃え滾る魂を埋める」火の粉となるのだと⁽³⁷⁾。

バーデル・チューも当初からワークショップに参加した人物のひとりである。チューは1913年6月にテキサス州マンフォードで生まれ、貧困と病弱ゆえに学校にほとんど通えず、独学を続けてきた。チューの詩「黒人の母親の嘆願」は、いつ警察によって命を奪われるかわからない息子を抱えた母親の切なる願いを炙り出す。「私の息子を歩道脇で捕らえて暴行し、いわれのない罪を犯したと認めさせないでください——彼がただ、黒人だからといって。裁判では彼が無罪か有罪かを決めるため、公平な機会を与えてください——あなた方白人に対して与えるのと同様に。」まだ少年のうちに自分自身を壊してしまわないよう、息子に「憎しみの理由」を与えないでくださいとチューは懇願する⁽³⁸⁾。

アンソロジーの最後には、警察の残虐行為を監視してきた10代の活動家「T」が逮捕された事件が詳述される。Tがたまたま道を歩いていたとき、交通違反を取り締まる警察官に出くわした。1人の警察官が住民を尋問しているとき、別の警察官が背後から近づき、尋問中の住民の腕と首を掴んだ結果、その住民は息ができない状況となった。Tはその警察官に近づき、身分証を見せるよう迫り、「そうやって暴動が起きるんだ」と抗議したところ、その警察官から「このくそ野郎、自分が賢いとも思ってるのか?」「どけ、汚いちんぴら」と罵られたという。何度も腹を蹴られながら「ここは公道だからどきません」と反論したTは逮捕され、警察署へと連行される車中でも暴行を受けた。Tのために証言台に立ったシュールバーグは、こうした事件は新聞では取り上げられず、「無名の、とるにたりないティーンエイジャー」による一件として片づけられがちだが、ワッツを象徴する事件——「LAを脈打つ緊張関係の小宇宙」——だと本の末尾で語った⁽³⁹⁾。

『焼け跡から』が映し出すのは刑罰国家の下で警察に対峙する人びとの姿だけではない。貧困というもう一つの暴力の姿である。先述のマケラーは、ワッツの公営住宅では人があふれ家賃は高く、民間住宅はさらに悲惨な状況にあると指摘する。ワッツ蜂起が起こるはるか以前から、ワッツは「世界でもっとも悲惨な都市の一角だった。」公立病院も、救急病院も無く、そもそも医者が高とんどいないワッツでもし何らかの感染症が蔓延したら、「イナゴの襲来を受けた穀物地帯のように、人びとは間違いなく命を落とすだろう」と警告した⁽⁴⁰⁾。

1936年1月にテキサス州南部でメキシコ系移住労働者の子として生まれ、仕事を転々とし、海兵隊に入・脱退後大学に戻り、作家になることを志したグアダルーペ・サーヴェドゥラの「涙をこらえるために」が描くのは、貧困という日常のなかで、息子のふとした質問に詰まる父と、貧困と

(37) Harry Dolan, "Will There Be Another Riot in Watts?," in *From the Ashes: Voices of Watts*, 34-35.

(38) Birdell Chew, "A Black Mother's Plea," in *From the Ashes: Voices of Watts*, 241, 243.

(39) Appendix T: The Trial of T., in *From the Ashes: Voices of Watts*, 261-275.

(40) McKeller, "Watts—Little Rome."

いう暴力を生涯をかけて問うことを誓う息子の姿である。ある肌寒い日、テキサス州の綿花栽培地で、メキシコ人の季節労働者と彼の息子が道端でトウモロコシを頬張っていた。片道6マイル（約9.66キロ）を歩いて教会へ向かい、その帰途の最中だった。「父の目がなぜ潤み、泣いているのかのように鼻をすすっているのか、少年にはわからなかった——少年が知りたかったのは、教会にいる他の人は皆スーツやネクタイ、素敵なドレスを身に着けているのに、自分たちはなぜ色褪せたジーンズと萎れたシャツを着て、ボロボロの靴を履いているのかだけだった。少年はわからなかったし、私はわからなかった」。かつての少年である私は、今「世界に蔓延るあらゆる不正」と闘い、「持つ者と機会を奪われた者とのあいだに聳え立つ障壁を打ち破る術」を生涯をかけて見つけ出すと誓った。自分は、黒人、白人、黄色人種、その中間の人びとの汗と血で作られ、知という砥石で研がれた「表現という剣」を武器として闘うのだと⁽⁴¹⁾。

4 資本主義批判，ブラック・ナショナリズム，前衛的な詩への希求 ——ワッツの13人

ワッツ・ライターズ・ワークショップはシュールバーグによれば住民の「希望の光」となり、ほぼ毎日のように自作を携えた若き作家が訪れた。ワッツをモデルとしたワークショップがアルタデナ、サンバーナーディノ、イーストサイド、ロングビーチ、チノのカリフォルニア州男子刑務所で結成された。このうち、チノでワークショップの設立に携わったジェームズ・トーマス・ジャクソンは、「収監されている人びと以上に私たちの助けを必要とする人たちがいるだろうか？」と問いかけ、彼らは私たちが必要だし、私たちにも彼らが必要だと強調した。そして、ワークショップこそが自分たちにとっての（ジョンソン大統領が掲げた）「偉大な社会」なのだと語った⁽⁴²⁾。

しかし、ワークショップの成功とは裏腹に、急激な拡大によって資金繰りは悪化の一途をたどった。大半の教員、スタッフは映画産業の従事者や大学関係者のボランティアから成り立っていたものの、有給のスタッフや、貧しい優秀な生徒への奨学金などで1968年には12万7000ドルの予算が必要だったのに対して、2月の時点では5万7000ドル赤字の状態だった⁽⁴³⁾。シュールバーグは「終わることのない資金集め」に迫られた。芸術と人文科学の全米財団から5万ドルを獲得したものの、財団の資金そのものが割られるなか、財政的苦境は続き、後援者や民間の財団に支援を求めた。資金集めに奔走し、自身の小説に時間を割くことができない状況にシュールバーグは次第に焦りと不満を覚え、ワークショップの運営を重荷に感じるようになった。シュールバーグは最終的にワッツや他地域のワークショップの運営から手を引き始めた⁽⁴⁴⁾。

(41) Guadalupe De Saavedra, "To Save a Tear," in *From the Ashes: Voices of Watts*, 87, 89.

(42) "Douglas House Foundation," n.d., Folder 4011, Box 470, RG 1.2, Series 200 R, Rockefeller Foundation Archives; James Thomas Jackson, "On Chino, San Bernadino, Altadena and Other Places," n.d., Folder 4010, Box 469, RG 1.2, Series 200 R, Rockefeller Foundation Archives.

(43) "Inter-office correspondence," NL to JGH, February 14, 1968, Folder 4011, Box 470, RG 1.2, Series 200 R, Rockefeller Foundation Archives.

(44) "Interviews: Mr. Budd Schulberg," October 3, 1967, Folder 4010, Box 469, RG 1.2, Series 200 R, Rockefeller Foundation Archives.

ワッツ・ライターズ・ワークショップのドキュメンタリーが放映され、ダグラス・ハウスが建てられ、参加者の作品が次々と世に出て、集大成ともいえる『焼け跡から』が刊行されたことは、ワークショップ内の緊張、対立が表出するきっかけともなった。シュールバーグは、ワークショップ内で、「白人に対する強い不信、ブラック・ナショナリズムと分離主義」に傾倒する若い層と、戦闘的であるものの「統合というかたちのアメリカの正義」に向かうより年輩の層とのあいだで緊張が生じていると綴っていた⁽⁴⁵⁾。

この内部での緊張関係は、シュールバーグの立ち位置に対する批判も絡んでいた。ワッツ蜂起を「これ以上ない豪華版テレビショー」と語ったシュールバーグは、もともと蜂起をスペクタクルとして、映画脚本家の目線で楽しんでいる様子があった⁽⁴⁶⁾。ワークショップでの経験を通して、「外」から傍観者としてワッツを眺めていたまなざしが修正を迫られ、自分自身と自身が拠って立つアメリカ社会のあり方そのものへの批判につながった。しかし「ワッツという崩壊した都市の砂漠で、ウェストミンスター近隣協会は希望の光となり、ワッツ・ハブニング・コーヒーハウスは自助と自己陶冶のオアシスとなった」と誇らしげに語るシュールバーグの流暢な言葉は、ワッツを「外」から眺める白人のインテリや富裕層の心はとらえたかもしれないが、長年ワッツに暮らしてきた人びとには、ビバリーヒルズに暮らす白人の部外者による上から目線の、傲慢な言葉に響いたかもしれない⁽⁴⁷⁾。ワークショップを企画し、時間とお金を注ぎ、映画や文芸の世界で培ってきたネットワークを駆使して多方面から支援を獲得し、受講生の作品を世に送り出したシュールバーグを称える人びとがいた一方で、彼のパターンリスティックな態度に少なからず反発心を抱く者もいた。

「ワッツの詩人」が結成された背景には、こうした緊張とシュールバーグへの距離感、異議申し立てがあった。ワークショップに当初から参加していた13人が離脱し、別の建物でワークショップを始めることとなったのである。その理由について、13人の1人ラスポエット・オジェンキは、これ以上「文芸上の小作人」として活動することはできなかったからだと述べた⁽⁴⁸⁾。それはシュールバーグによって「締め付けられている」と感じる若手の作家のよる、「微妙な検閲」への異議申し立てだった⁽⁴⁹⁾。同時に、「ワッツの詩人」の作品には、資本主義そのものを問う姿勢——共産主義と決別した左派リベラルであるシュールバーグとの思想的立場の違い——やブラック・ナショナリズムへの共鳴、より前衛的な詩への希求などを読み取ることが可能であろう⁽⁵⁰⁾。

『焼け跡から』が大手の出版社から刊行された書物の体裁をとったのに対して、「ワッツの詩人」による作品集『ワッツの詩人たち——新しい詩とエッセイの本』は同人誌的な装いである。13人のなかでもっとも若いクインシー・トループ（のちに『マイルス・デイヴィス自叙伝』をはじめ数多くの著作を発表し、カリフォルニア大学サンディエゴ校文学部の教員となる）が編者を務めたこ

(45) Memo, Budd Schulberg, March, 1967, Folder 4010, Box 469, RG 1.2, Series 200 R, Rockefeller Foundation Archives.

(46) Budd Schulberg, "The Angry Voices of Watts."

(47) Budd Schulberg, "The Angry Voices of Watts."

(48) Memo, Woodie King, Jr., to Norman Lloyd, December 9, 1968, Folder 4011, Box 470, RG 1.2, Series 200 R, Rockefeller Foundation Archives.

(49) Memo, King, Jr., to Lloyd.

(50) Smethurst, *The Black Arts Movement*, 309.

のアンソロジーには、欧米の白人社会からの決別と、ブラック・ナショナリズムとの共振がより色濃く示されている⁽⁵¹⁾。

警察暴力との闘いは『焼け跡より』と『ワッツの詩人たち』に通底するテーマである。『焼け跡より』が警察暴力に抗議したTの裁判記録で終わる一方、『ワッツの詩人たち』は、1967年11月14日にロスアンジェルス市警(LAPD)によって9回撃たれ命をとりとめたサーディアス・モーガン・ブレヴァードに捧げられている。「時代を記録する者として、詩人やエッセイストとして」跪いていたブレヴァードがなぜ何度も撃たれなければならなかったのか。「黒人コミュニティのメンバーとしてなぜか???と問いたい。この本はすべての同じような事件にも捧げる」という著者一同の言葉で幕を閉じる⁽⁵²⁾。

13人の1人ミルトン・マクファーレンの詩「入るか、入らないか」が示唆するのは、黒人の命を奪ってきた西洋社会への決別と、黒人コミュニティのなかから新たな価値観を創造することへの期待である。アメリカは社会の仕組みそのものが「黒人を忌み嫌うもの」となっている。黒人を生まれつき劣った地位へと押しやる人びとは「憎しみにも値せず、哀れみの感情だけがわく。」理不尽にも、人命、特に黒人の命を繰り返し奪ってきた社会の構造、制度、病は是が非でも拒絶されなければならない。命を軽んじ、勝手気ままに人びとを蝕む競争を戒め、「利己的な欲望ではなく人びとのニーズに沿った」経済のあり方を目指さなければならないとマクファーレンは語る⁽⁵³⁾。

ロバート・ボーウエンの詩「お前たちは忘れるのだろう」は黒人の涙と血であふれてきた「400年」の歴史を綴る。そこでは「(非暴力・不服従を掲げた)公民権運動 vs. (暴力的で分離主義的とされる)ブラック・パワー」という図式を突き崩す、黒人史を貫く問いが示される。ボーウエンは、メドガー・エヴァースも、マルコムXも、マーカス・ガーヴィーも、マーティン・ルーサー・キングも、皆「殉教者」だと語る。彼らは人びとのなかから起ちあがった兄弟であり、人びとによって突き動かされ、私たちの苦しみを辿り、「はるか昔ある夜遅く、遠く離れた地で黒人の魂を奪った白人たち」への「生贄」として、供物台に乗せられた兄弟であると⁽⁵⁴⁾。

『ワッツの詩人たち』には、『焼け跡から』よりもさらに鮮明に、ブラック・パワーへの志向を読み取ることができる。黒人自由闘争の活動家であり、1974年にブラック・パンサー党の党首となる黒人女性エレイン・ブラウンの詩「沈黙の終わり」は「自分は男(a man)だと静かに叫びながら夜の暗闇のなかに立ち尽くしたことはあるか」、「太陽が照り付ける真昼間に、いつか声が届くときが来るはずだと願ったことはあるか」という問いで始まる(なおこの詩は1969年発売のブラウンのミュージック・アルバム『時を掴め(Seize The Time)』に所収され、のちに広く知れ渡ることとなる)。ブラウンは、フィラデルフィアの高校を卒業後テンブル大学に入学したものの、作曲家を目指しカリフォルニア大学LA校へ籍を移し、ワッツの公営住宅でピアノを教えていた。ブラウンは、沈黙は終わらせることができること、「私たちに必要なのはただ銃を手に取り、男になる」

(51) Nowak, *Social Poetics*, 20.

(52) Quincy Troupe, ed., *Watts Poets Writers: A Book of New Poetry & Essays* (Los Angeles: House of Respect), 1968.

(53) Milton McFarlane, "To Join or Not to Join," in *Watts Poets Writers*, 1, 6-8.

(54) Robert Bowen, "Y' All Forgit," in *Watts Poets Writers*, 86.

ことだと呼びかける⁽⁵⁵⁾。これは、警察による理不尽な暴力に晒され、二級市民として尊厳を否定され、「一人前の男」になる機会を奪われてきた黒人男性にマスキュリティを取り戻すよう訴えるものである。同時に、それを呼びかけているのが女性のブラウンである点に注目したい。「沈黙の終わり」は、黒人住民たちの「声」をいかなる手段をもってしても轟かせようとする、黒人女性としての決意の表明でもあり、ブラウンのアクティヴィストとしての原点を成す作品であった⁽⁵⁶⁾。

おわりに

ワッツ・ライターズ・ワークショップは、1965年8月のワッツ蜂起を契機に、ビバリーヒルズに暮らす主として白人富裕層の映画関係者や作家たちと、ワッツを生きる黒人やメキシコ系住民が会おう〈場〉となった。この〈場〉は当初ワッツという「劇場」を「外」から眺めていたシュールバークを動かし、ハリー・ドーラン、バーデル・チュー、クインシー・トループなど脚本家、作家として才能を開花させる人びとを登場させる磁場となり、エレイン・ブラウンのような黒人自由闘争を牽引する活動家の足場の一つともなった。それはLAの歴史において会えることが少ない、ワッツとハリウッド、黒人、メキシコ系の労働者とリベラルな白人富裕層の「出会い」の〈場〉であった。文化を「貧困との戦い」に動員し、蜂起の再発を防ぐために活用するイデオロギー（ダニエル・ワイドナーの語る「文化リベラリズム」）の下で、『焼け跡から』は両者の「出会い」と緊張のなかから生み出された作品であったと言える。シュールバークの「微妙な検閲」と、共産主義を忌避する態度、ブラック・ナショナリズムへの距離感、伝統的な詩や散文のスタイルを重んじる姿勢への反発は、『ワッツの詩人』を世に送り出す背景となった。

ワッツ蜂起を分水嶺として大量収監社会の形成が進むなか、『焼け跡から』と『ワッツの詩人』は「グラウンド・ゼロ」となったワッツを生き、警察暴力と貧困というもう一つの暴力を問うた人びとの鼓動を伝えるものである。ワッツ蜂起後に現地を訪れたマーティン・ルーサー・キングは、サウス・セントラルでは白人のみならず「黒人の中産階級と指導層に対する幻滅と憤懣が存在している」と指摘し、この発言を引用するかたちで度々ワッツやサウス・セントラルにおける「公民権運動の不在」が指摘されてきた⁽⁵⁷⁾。しかし、こうした文化的表現を武器として——グアダルーペ・サーヴェドゥラの言葉を借りれば「表現という剣」によって——地域に暮らす黒人やメキシコ系住民による、制度的人種差別との闘いが繰り広げられていた点にあらためて注目したい。ワークショップの参加者にとっては詩を綴り、作品を世に送り出すことは闘争の一部であった。大量収監社会の研究はこうした「グラウンド・ゼロ」の人びとが生み出したアートと、そこに埋め込まれた思想にも目を向ける必要がある。『焼け跡から』と『ワッツの詩人』はただ黒人の詩人、作家による「先駆的なアンソロジー」であっただけでない。そこには、今日のBLM運動に通じる、黒人の命を軽んじる社会のあり方そのものを根底から問い直す思想が息づいていたのである。

（つちや・かずよ 東京大学大学院総合文化研究科准教授）

(55) Elaine Brown, "The End of Silence," in *Watts Poets Writers*, 50.

(56) Yuhuru Williams, *Rethinking the Black Freedom Movement* (New York: Routledge, 2016), 69.

(57) "Riot Leaves Sense of Hopelessness," *Los Angeles Times*, October 17, 1965.